

た。また、一九九〇年には、大塚教授が会長（二期二年）に選出され、二〇〇〇年からは小林教授が副会長（二期四年）をつとめた。そうした最中の二〇〇〇年一月五日、旧石器時代遺跡の捏造事件が発覚した。

日本考古学協会は、一週間後の一月一二日、明治大学で緊急役員会を開き、前・中期旧石器問題調査研究特別委員会の設置を表明した。二月二〇日には、同会準備委員会が発足し、委員長に戸澤教授が選任された。翌二〇〇一年五月の第六十七回総会で、前・中期旧石器問題調査研究特別委員会の設置要領が承認され、以後、二〇〇二年の七月まで、戸澤委員長が捏造事件の全容解明に尽力した。また、同委員会のもとには、第一（遺物検証）、第二（遺跡検証）、第三（検証技術開発）、第四（型式研究）、第五（研究方法論研究）の各作業部会がおかれ、安藤教授は、第五作業部会長として参画した。

最後に、小林教授は、二〇〇六年、入院加療中の一月五日急逝された。定年退職五カ月前の享年六九歳であった。翌二〇〇七年一月四日には、明治大学アカデミーホールで、お別れの会が催され、知人・学友・教子など八六五名が参列した。

## 地理学専攻

松橋 公治

地理学専攻の教室史についてみれば、岡山先生が退職される際に「文科専門部史学科・地理歴史科時代」の一九五〇年前後までについて（岡山、一九七四）と、松田先生が『文學部五十年史』の中で、これに続く一九五〇年代前半から一九八〇年代前半までの現教室の原型が整う時期について（松田、一九八五）、それぞれまとめられたものがある。その後、藤田教授が市販雑誌『地理』の特集に、「明治の地理」の案内を、いわば外向けに豊富な資料も交えながら、ていねいにまとめている（藤田、一九九〇）。したがって、私に科せられた課題は、松田先生の後を引き継いで、一九八〇年代前半以降の二〇数年間についてまとめることである。といっても、この課題自体は、一九八八年に赴任した私にとっては、赴任直後の五年間は右も左もわからないままに過ごした記憶しかないので、少しきつい任務である。

赴任当時、まずもって驚いたのは教室会議の議論であった。松田先生は、「教室の民主的な気風の点で、全国大学のどの地理学教室にもひけをとらない」と自負しておられる。その原点は、毎週金曜日の昼の教室会議である。これは、岡山先生が提案され、定期化されたものであるという（松田、一九八五）。その伝統は、現在も続いている。松田先生が「やんちゃな学生の一人」と書かれておられた小疇先生が口から泡を飛ばしながら、石井・松田両先生と対等かつ真剣に議論されていた様子は今でも忘れられない。これは、あまり「タテ社会」の強くない理学部地理の出身で、教授会で向かいに座られていた石井先生に向かって「石井さん」と声をかけて、他専攻の先生方から注目を集めた（矚目を買った？）、その本人の感想である。

私の人事はもめたようである。赴任してから、長岡先

生から伺った。松田先生と分野的に重複することが大きかったようである。石井先生とかなりやり合ったらしい。その長岡先生も、「もめた人事を通じて」感じたことは、こうした地理学専攻の良き伝統を見直したという話だった。長岡先生は例のていねいな口調とはいえ、これまたきついことをびしっと話される。そんな調子でやったのではないかと想像している。私が地理学教室のそうした側面を改めて見直す機会になったのは、結局のところ公募となった梅本教授の人事の時であった、

教室会議は、地理学専攻の「最高意志決定機関」である。病院や大学の激務などと、私的・公的にいろいろな理由があっても、海外出張や学会出張で留守である以外には、この時間帯だけはまず全員が揃う。そして、教室に関連することは、学内外を問わずに問題や関心事をすべて出し合い、とことん話す。これぞ、地理学専攻の伝統である。

五〇周年以降の二〇数年間は、梅本教授が新たに加わった時まで、いわば「拡張」期であった。同時に、千葉先生や石井・松田両先生、古賀先生、そして小疇先生の退職の時期と重なって、入れ替わりも多かった。また、退職された古賀・小疇両先生の補充が全学部的な見

地からできなかった関係でみれば、「縮小」期でもあった。お辞めになった先生方の思い出から、いくつか拾い出ししておく。

一九九三年三月に退職された石井先生は、総理府資源調査会時代から続けられている災害論・資源論に加えて、農業地理なかもドイツ農村研究などですぐれた業績を残された。経済地理学会の会長を二期六年（一九八八―九三）務められ、名誉会員である。学内では、学部長、図書館長を歴任された。現在、明大名誉教授である。その後任が古賀先生である。退職後も、教え子を中心とする「背広ゼミ」で定期的に大学に來られている。その間にも、若いときから続けられていた調査研究を地道におまじめになつていた。これが二〇〇七年三月に上梓された『国土保全の思想』である。おまじめになる過程で、その一部を駿台史学に掲載したいと申し出られた。ご協力できなかったことが心残りである。

会長就任と私の赴任とが重なり、会長の「鞆持ち」のようにして学会のイベントにお供させていただいた。とはいえ、そのように思っていたのは私だけで、切符や宿の手配はすべてご自分でやられ、航空券などは私の分まで手配していただいたことすらある。また、まめにメモ

をとっておられた先生は、スケジュール管理でも一枚も二枚も上で、学会や出張先の朝食の時に、よく問わず語りでその日の予定を話された。出先での私のアバウトさを見透かしてのことであった。石井先生のメモ魔の片鱗は、現存する教室会議の記録にも遺憾なく発揮されている。実に事細かにかつ丁寧で、それでいて話のツボをおさえた内容は、自由に話している教室会議の現場で記したものととても思えない。これを引き継いだ、古賀先生の記録も、石井先生のような細かさはないものの、その場の様子が実によく活写されたものであり、驚かされる。専攻主任になって、私は話し合われたテーマだけは書き残すようにしているが、最近では誰が記録しているのだろうか。

松田先生が石井先生に続いて一九九四年三月に退職された。住民の目線にたつたすぐれた工業地理の実証研究で知られている。経済地理学会の設立に尽力された。設立当初こそ役員名簿に名前があるが、その後は裏方に徹しておられたようである。しかし、経済地理学会の設立から拡大期にかけてのその活躍ぶりは、「経済地理学年報」にもその一端が当時の記録として残されているように、「知る人ぞ知る」であったようだ。学会の先輩たちが

かつての学会運営などの苦労話で話題にするのは、会長になられた石井先生ではなく、松田先生である。その後、学会の事務局が設立以来一九七八年まで明大地理に置かれ、経済地理学（会）のイメージが明大地理に定着する上で、大いに貢献されたお一人である。経済地理学会の名誉会員である。学内では学部長を務められ、現在は明大名誉教授である。その後任が、東大助手から赴任してきた川口教授である。松田先生の分野ではすでに私がいだったので、石井先生がある程度はカバーしておられたとはいえ、不足していた社会地理学の分野が充実された。

松田先生は、お辞めになった後、『私の満州と地理と明治大学』という本を上梓された。その編集段階からお手伝いをさせていただいた。ご出版の理由に「全くの私事ではないかと思ひ」と述べられているように、明大地理や明治大学のことはもちろん、東大の地理学教室や日本地理学会、経済地理学会のことなど、その内部におられた方でないといわれない「こぼれ話」が随所に盛り込まれている。しかも、この「こぼれ話」が、先生御自身身を置かれた場の様子や出会われた方々の個性のエッセンスを簡潔かつ豊かに捉えておられる。作業の途上で、その「こぼれ話」に関わる思い出を時々お聞きする機会

もあつた。淡々と、しかし熱く語られるその様子に、先生のお伝えになりたかつたメッセージが何であるかを感じずにはいられなかつた。

そのこと以上に、一見すると、あまり細かなことにはこだわらないように見える松田先生であつたが、その手伝いを通じて、その記憶力のすばらしさもさることながら、石井先生とは違う意味で、場の雰囲気や出会いの機微を実に細かなところまで観察されていることに驚かされた。思えば、分野的に見て実質的な後継者を自認しているながら、ご研究の継承は別にして、この「共同」作業に携わるまで先生のごことはあまり知らないままに過ごしてきたことを改めて痛感させられた。これを機会に、在職中にはしたことがなかつたが、正月には毎年ご挨拶に、もちろん実は飲みに出かけるようになった。これだけ多くのことを学んでいながら、私は在外研究と重なつたために、石井・松田両先生の退職パーティには出席していない。

石井先生の後任の古賀先生は一橋大学退職を一年前にして赴任してこられて、二〇〇三年三月に退職された。インドに関する研究では、地理学はもとより、人文社会科学分野にあつても第一人者であつた。大阪市立大学に

師匠を見習つてか、多くの「豪放な」教え子たちも、師匠の前では「借りてきた猫」だというから、さもありなんといいところか。四〇歳を前にした私の教授昇格人事では、細かなことに触れずに「あの通りの男ですから」が昇格理由だつたと、後で何人かの方から聞かされた。小疇先生の研究室の「後任」が私である。

後先が逆になつたが、重なることになつた千葉先生についても触れておかなければならない。先生は、岡山大学に転出された森滝先生の後任として筑波大学から一九七九年九月に赴任され、一九八七年三月に退職された（非常勤は九二年三月まで）。民俗地理学の第一人者であつた千葉先生のことを、教え子の一人である茨城大学の小野寺氏は「地理学者であると同時に、民俗学者」と、「同時に」のところアクセントを置いて捉えておられる。両分野の特色ある部分を融合することに苦心されたからのものである。長年、白山山麓の村落の調査研究に取り組まれ、狩獵伝承、地域や風土に関する研究で多くのすぐれた業績を残された。先生の後任が私である。だから、私もそのような分野を研究していると多くの方から思われた。そして、その度に多くの方の期待を裏切つてきた。あまり長くなかつた在職中に学んだOB・OG

在職中に書かれた、イギリスに関する経済地理学研究成果で、私などには大いに刺激を受けていた。大学院時代に、ある研究会で鋭い質問でやりこめられ、たじたじになつたことが思い出される。このような学会・研究会でのお付き合いがあり、赴任以前に非常勤をお願いしていたので、隣の部屋に來られても、なんら違和感がなかつた。学生部の仕事をしている時、裁判の關係で年末の二九日に大学に出ることがあつた。すでに暖房が止まっている研究室で、ストーブを持ち込んで卒論の個人指導をしていたのは驚いた。年が明けて伺つたところによれば、毎年そうしていたそうである。

続いて小疇先生が二〇〇六年三月に退職された。氷河地形の第一人者であり、国際的に活躍されていた小疇先生は、山岳部の部長でもあつた。学部長を務められ、最後の二年間は博物館長も務められた。現在は名誉教授である。その後任が現館長の杉原先生である。あの「アツハツハ」という笑い声は、本人とすれば普通の声であつたようであるが、一〇階のエレベータを降りる前から聞こえるほどの大きさであつた。事ほど左様で、道産子というか、雄大な山々を相手にしているせいか、豪放磊落であつた。多くの教え子たちは「師匠」と呼んでいた。

諸君で文化地理に関心を持っている人が少なくなる。千葉先生の影響力を感じる場面である。

千葉先生は二〇〇一年一月に亡くなられた。そう言えば、この二〇数年間では、一九八七年八月には明大地理の基礎を構築された岡山先生が、九五年五月には長いこと大学院の非常勤をしていた矢澤先生が、九五年四月には大学院後期課程をつくるにあつて広島大学から赴任された下村先生が、いずれも戦後の地理学を築かれた先生方が相次いで亡くなられた。

長年にわたり二部のゼミなども兼任していただき、一九九三年からは大学院地理学専攻の教授を務めていただいた江波戸先生も、二〇〇四年三月に退職された。東大大学院の地理学専攻で、蚕糸業地域の経済地理学研究で初めて課程博士を取得された俊英は、私の大学院時代には、すでに世界の民俗音楽の「権威」であつた。その方面では知らない人がいないと言われている。その一方で、ご自分の住まわれていた田園調布をはじめとして、東京のことを例の細かな実証主義で調べ上げ、地理学者としての研究を進めておられたことを知る人は多くない。赴任直後に、非常勤講師の方々との懇親会の会場で、院生の指導をもっとしっかりやらないと人は育たない、と叱

咤激励されたのが忘れられない。

一九九一年四月に着任した梅本教授は、確か教職の人事を使つての純増であつたと記憶する。赴任後二年間ほどは、専攻の専門科目を担当するのを自らためらつてゐた。自然地理学Ⅱ（気候学にあたる）を長いこと担当していただいた河村先生が九一年度で退任されて、九二年度からの新たな担当を決める際にも彼は担当せずに、東大（当時）の松本氏にお願いした。確認してみると、四年の二部の自然地理学Ⅱに「こそつと」入つており、これが専門科目における彼のデビューだった。九五年のカリキュラム再編によって気候学が設置され、晴れて担当の運びとなつた。

最後に、教育面に触れておきたい。一九九五年のカリキュラム再編を受けて、それまでのゼミ・演習重視の基本線は踏襲しつつ、専攻カリキュラムの充実が図られた。一・二次次では、概論が三科目（人文・自然・地誌）体制になり、三・四年次の講義科目では自然・人文分野の豊富（分野の明確）化（自然では地形学・気候学・第四紀学、人文では経済地理学に並んで、社会地理学、都市地理学のそれぞれ三本体制へ）されるとともに、スタッフ面から対応しにくい分野については特説（自然・人文

それぞれ二つ）を設けて、主に若い人材にカバーしてもらうようにした。

同時に、地理学実習も一・二次次（Ⅰ）と三・四年次（Ⅱ）に分けるとともに、必修に付随するかたちで確実に受講させる体制になつた。なかでも三年ゼミの実習では、駿台地理談話会において報告が義務づけられる（慣行化？）とともに、その報告書は学部予算で刊行がなされるようになった。ほとんどのゼミで報告書を作成することが慣行になつてゐる。こうした実習重視の観点は、二〇〇〇年代に入つて「歩く、観る、考える」を専攻のモットーとして明確化される中でさらに具体化された。実習は二〇〇六年現在、年間延べ六〇日に達している。必修に付随する実習が基礎演習も加えて、さらに充実化されるとともに、かつての「日帰り実習」は年六回（五・六・七・一〇・一一・一二月の第一土曜日）の「オープン参加型実習」として、院生の手伝いを得ながら計画的に実施されている。なお実習重視は大学院についても具体化され、二〇〇七年度から「地理学フィールドワーク」が新設された。

このように充実化されたカリキュラムも、一九九四年以前との対比で見ると、後者をベースにして豊富化した

に過ぎないことに気づかされる。後者のルーツは一九五〇年代に遡る。一九五五年に「新制地理の基礎はほぼ固まつた」（松田、一九八五）とされる、岡山先生が中心となつてつくられたというカリキュラムの偉大さを、改めて感じないわけにはいかない。

赴任後の最初の卒業生を送り出す一九八九年三月二六日、恒例の謝恩会を済ませた後、三次会まで付き合わされた。最終電車に遅れて途方に暮れている私を、すでに下見済みの学生たちは案内なしで、うちまで車で送つてくれた。明大地理では、私の「先輩」にあたる四年生は実にしっかりしていた。こうした「猛者」が少なくなかつたOB・OGが悲願にしていた明大地理の同窓会が、岡山先生が亡くなられた翌年一九八八年一〇月に開催された先生を偲ぶ会において発会した。卒業生約四〇〇〇名という大所帯にしては遅い組織化であつたが、これにも教室の基礎を築かれた岡山先生がかかわつてゐた。もつとも、これができたからといって、教室の求心力が高まつたという話はずいぞ聞かない。明大地理らしいところかも知れない。

岡山俊雄（一九七四）「明治大学文学部地理学教室の歩み

——文科専門部史学科・地理歴史科時代——」、「駿台史学」第三五号、六八―八〇頁。

松田 孝（一九八五）「地理学専攻」、所収 明治大学文学部五十年史編纂委員会編『明治大学文学部五十年史』、四九二―五〇〇頁。

藤田直晴（一九九〇）「都心に立地、自由な気風の伝統——明治大学文学部地理学教室——」、「地理」第三五卷第四号、九二―九七頁。